



忠孝比玉傳

駟



八達3
981
4



本清

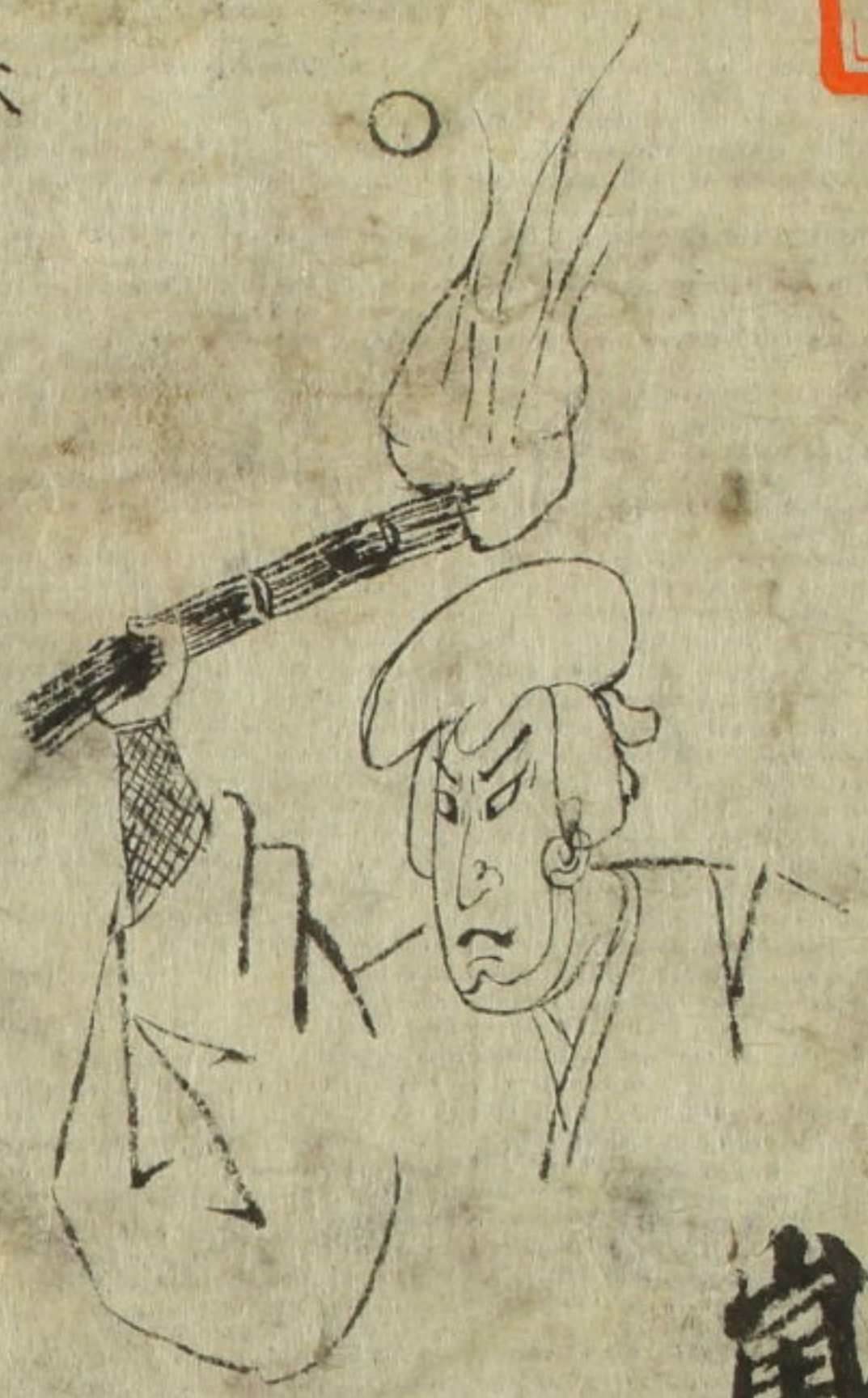


西



西清

984
4



貞壽



養拙菴主人著

第十一回之下

再說平内ハ土氣の方と膽望て「必死」道とそをらぬかたへ
 何音信の山時多と吟も終らざるよ不曽防備樹林の花茂り
 聰的と一箭飛来り平内が膝へ羽ふくら責て貫ハ叫と
 仰よ及返りぬ小卒太周章走り寄刀よ及打四邊と見
 廻し何者ぞ狼籍ナと叫り這方の樹蔭より平山東馬
 澤井軍治弓矢投捨陌々次よ勇と固め突弦と放ま玉
 先日選眼覚へるを明燧ノ刀打ふり切て鬼ハ伴當亦ハ

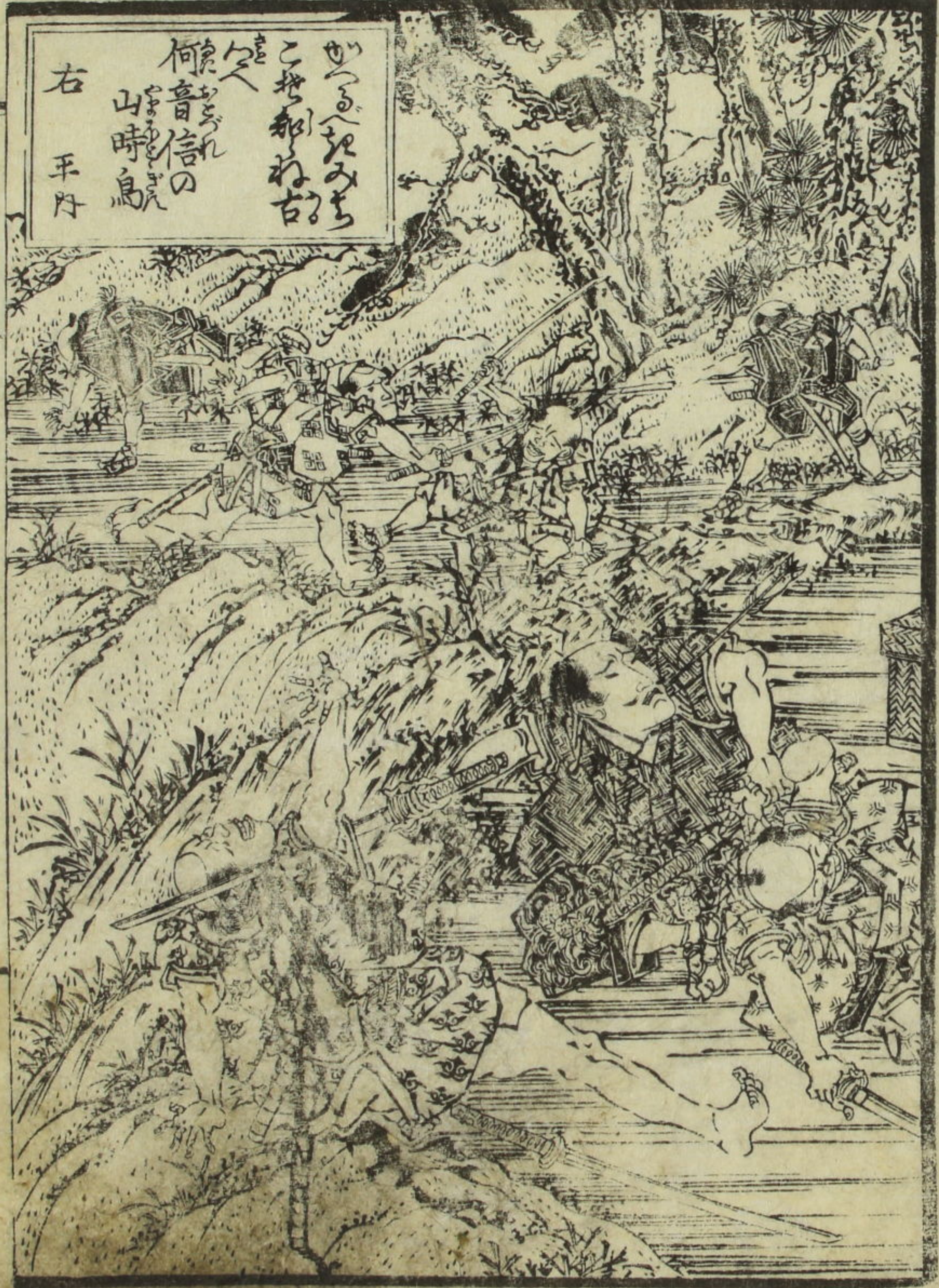
そらや盗人よと散ぐよ跡も見ずして逃去の痛みに屈
 せぬ剛氣の平内起上りて刀引抜卑怯なる奴原が拳動
 かるを名乗合勝負せでとゆらひ掛つて東馬が反上
 二三寸切付る後よ閃く軍治が刀外りて二人と左右ようけ
 一瞬がら六戦ひしが最初の矢瘡よ勇と任せず些少
 よろろ死見くくまば得たりと東馬が踏込で腸より大袈裟
 よ乳の下鎧で斬下まば平内今ハ一軍の兼口踏やと云ふ
 から妻も一慥と倒るくと逃かると一鏗叱と刺通す小
 卒太斯と見らるるも主人の敵其呼走ると打てかまふ
 世伏ども遣らんと突出す竹槍は數ヶ呎の瘡ハ肩より

忠義を疑はるる小平太が死生不知の太刀突はせ伏し
 らが斬伏し其刃も鉄石を切りざりて刀を抜き突ら
 前へ尾破と倒るる折ら遠く藪の方入声多くはる
 東馬軍治の連軋慌張平内が懐中へ手とさし金銀
 二百兩かの一抽共よ奪ひ取跡跡も志くず成るる
 ろり衆多里人ホ犁鋸鎌と提く落草人殺るる
 喚叫し遠来まで賊ハ早晚逃去鮮血滾くどて数多の
 先骸道路に倒伏在るる郷人ホ會集ひ點見する
 行李の扱は坂井左門佐家中藤代平内紀し有る
 其時隨即急遽を以て土氣城中へ知らせるる平内
 其時隨即急遽を以て土氣城中へ知らせるる平内

家の衆皆く夢現の如く覺大に號泣るる城を治は
 ろひ男東早速彼地へ越へ仔細相伝へ急ぎ
 歩率小平太が身久平なる者近村は有るるを召ひ通夜を信
 止るるまゝ土人が知らせるる遠く父平内が死骸
 漢と交強く働くと見えて刀さくらの如う有ける小平太ハ
 走る肩息あるる東之寄大音如何小平太敵ハ推る
 兎身ハいつかと喚る声の耳は通しや一瞬して目を
 東君うろ待兼一賊ハ東馬と軍治之詐欺白々討つ
 主人の初太刀東馬が政上へ切結るる賞へか投逃
 云々も苦しく疲へるる兩人赤流を交勵し浅瘡うつる

小卒太氣を怪は持べしとわがつけ。又抱すま下とその甲斐
 うく漸く息づく人微より共は畏うくし音信山の瀉しとら
 成よる東領き成むと昨朝西人の族と奔の由届ありし
 察するは東馬較量の遺恨と扱み彼等がふあよ疑ふし
 去らば飛兵を用人しとそ憶病未練なり已西人何
 國へ逃るくとも後て尋あてすくは斬さのうき憎憤晴さ
 置べきやと掌と扱つと齒と結つと罵まが久平下郎よこそ
 あま見の敵後令西人之頂六臂の魔王るのりす。天地の間
 よこそあふく。ゆるり搜しけり怨みの又思ひかすへと声
 と戦て怒りける已はは締片時も早く入へ變すべしと

親は里人は謝し死骸と二張の轡子よむまのせ土と無とさして
 急ぎ我家へ抵りたる卒内が渾家娘の死骸と其と見ると
 つも取廻てをを揚げ皆し正葬すくはくくが良ありて
 渾家小川世は武士の勇むと悲しきこのハるし一昨朝後
 きの一時醫の断らるとそはける有べき験うらめど公用
 うまは是非うくもれ送つやせしまの残今目の前よ見
 ありとく之と経返し口流が玉江も咽々哽々賤妾はけ家へ
 嫁入系らせしもたや三しを才差うけは身を露たうくも
 拙しと思ひるす明暮不便とくは愛するのうと海山の
 此世と十の二も誓ひの系らせず。斯く入るは愈り果るの



何音信の
 山時鳥
 右 平丹



五卷之四

こそ。ひすくも。口惜。是。能。へ。女子の身。うま。か。と。て。泰山の
 敵。夫。と。共。は。猶。て。敵。を。討。課。せ。君。が。修。羅。の。安。執。晴。ら。せ。せ
 中。へ。き。と。前後。不。覚。は。歎。き。け。る。甥。戒。淨。坊。は。此。夜。の。經。動
 鳴。ら。り。も。も。く。も。未。の。居。け。る。が。傍。ら。り。二。入。と。説。諭。て。実。は
 昨日。ハ。紅。顏。は。傲。ら。し。今日。ハ。白。骨。と。ら。る。又。傷。病。先。ハ。か。れ。共
 漚。の。世。中。維。ろ。無。常。と。知。速。の。理。を。逃。ま。ん。や。伯。父。君。の。殺
 害。は。逢。の。の。測。ら。ざ。る。言。を。ふ。ら。皆。是。病。世。ら。の。定。ら。る。と。
 歎。き。六。の。つ。迄。も。尽。べ。う。ら。ず。唯。は。う。ハ。疾。く。遺。蘇。を。取。を。め
 追。善。供。養。は。多。く。せ。う。と。ま。る。り。血。屬。打。寄。親。子。の。者
 久。平。緒。と。も。す。ま。ら。く。と。此。近。の。増。形。の。ど。く。嘗。み。香。花。院。を

華。と。ら。る。時。光。流。水。の。ど。く。後。ら。く。百。々。日。も。あ。ひ。ま。ぶ。束。思。惟。我
 實。は。寤。然。と。扱。と。す。る。身。を。共。に。天。と。裁。さ。る。仇。有。ら。ず。ら。一。日。の。り
 言。も。猶。然。の。ま。だ。望。け。り。黄。泉。よ。て。父。の。言。用。斐。々。と。思。は。れ。と
 已。は。其。細。交。り。今。ま。王。江。久。平。も。已。不。得。何。国。母。で。も。身。は。遺。托
 共。は。敵。討。う。と。死。ら。う。ら。る。身。を。則。相。公。へ。一。通。の。奉。言。と。以。て
 被。書。の。猶。ひ。せ。り。今。ま。皇。隆。父。子。隨。即。許。答。せ。し。く。殊。に。王。江。が。女
 性。を。て。健。氣。さ。る。と。誓。ひ。あり。翌。日。東。山。と。名。な。れ。五。を。加。て。後
 娘。の。用。意。金。と。一。二。百。兩。并。一。三。入。ハ。一。腰。笥。の。り。賜。は。た。る
 登。程。一。敵。討。首。尾。を。仕。提。世。目。勢。及。歸。国。の。こ。し。へ。三。途。入。を。と。し
 け。ま。各。有。難。也。と。う。と。退。朝。一。夫。り。如。と。多。く。説。諭。を。一。次。の

方へ預り且生實に抵りて王江が母の服乞へて遂に六月二十九日
 十五日我家と直に濱野村本行寺へ過りて從前長平坊の建
 跡の夏杯のまじり日泰上人より縁故と物態多し奉り頂
 刻して退下しつ鑑倉の近田のまじりても大都會にて武士の群
 聚する所を尋ねて一と相列しておのひをける其後
 日泰上人飛澤坊と召し今般束出づ復舊の志固し思因縁と
 へ三三から入の子ころの道々斯有れへ予思惟するに敵と克
 哉前の産とや必だ始終の上方へ潜ひ出づ汝予が命を
 以て京都妙満寺へ逃れり東赤が辱ねる事有るか
 遣ずべし去らば法衣の角継令如何なる事とす人殺傷する

から子と固く誡むひをば戒淨坊畏奉りて去り非難と稱し
 命に重五十貫目の救神杖と進せ優と突師命と奉り單京北を登り
 第十二回 若宮小路東訪醫主玄珠
 備も東赤の鎌倉へ抵り龜谷に微成る橋居りて那地這り
 の執開場へ徘徊し或は衙門と潜行し雙敵と捜索し
 夫との端緒もさうり久ま東久予の對の雙人東馬
 時昔は我父と討し時頂上を瘡を炙りて岐が御令條
 倉よ長居せし上京する但東奥へ下るるも白屋の仕
 還る人目も綴るるまじり先當所は酒居瘡と瘡居し
 登程さうらめ去り是より数多の瘡医と尋ねん其

去^レ向^ル知^ルる^事も有^レる^事と云^フべ^ク久^平も然^ルる^事と云^フべ^ク也^{ナリ}
外科^ノの^医あ^リま^は不^法防^抵と^シて^疾病^ヲと^シて^療治^スと^シて^後世^ノに^傳へ^ルる^事も
形容^ヲと^シて^結つ^て尋^ねま^して^取て^知ま^して^りる^事も^一日^東若^宮小^路
と^通つ^てけ^る事^も。衛^門の^柱は^外科^杉葉^玄琢^と館^隆と^稱す^事も
亮^補の^内は^幽蘭^の磁^盆と^名を^取る^事も^一日^東若^宮小^路
へ^通つ^てけ^る事^も。何^れ地^にも^り以^て感^ずる^事も
や^しあ^らう^事。東^小子^ハ近^国の^者ら^るが^當所^鶴岡^ハ僧^宮へ
と^通つ^てけ^る事^も。彈^路や^不圖^脚と^折傷^の由^來萬^望国^の事^も
は^療治^スと^シて^推系^仕と^シて^段勤^は答^あま^はば^る事^も。髮^をま^して^髮
ハ^少傳^ハ也^{ナリ}。和^有へ^と奥^へ入^る事^も。無^量時^房主^と日^々て^年

紀^知命^許る^事。圓^顯の^医人^近接^東が^人物^下賤^から^る事^も。
先^客廳^へ通^つて^氏に^姓名^と通^つす^事。烟^茶終^終と^る事^も。時^東忽^と
床^頂は^掛あ^る横^幅と^懸視^て不^審と^る事^も。禊^を對^し
唐^突と^らる^事。尋^ねま^して^復と^れあり^事。あ^らう^事。壁^上の^詩ハ^何人^の
作^らし^事と^あま^はば^去ま^はば^先年^不佞^小恙^{あり}て^上州^草津^の
の^温泉^へ過^つて^下総^土氣^坂井^氏の^藩中^藤代^平内^とや^り
人^と同^居し^て還^留の^後は^圓基^聯句^とて^作ら^し事^も。如^故と^す
こと^も其^節平^内と^る事^も。温^泉の^詩あり^不佞^再會^の記^と
あり^て請^て書^きま^して^ひら^ば萬^密千^山靈^液注^道道^誰伴^白雲^と
郷^人間^此地^須何^老除^却從^來雙^鬢霜^の作^らし^事と^結ま^して^也

東渡と撰較せんかくとて流なが一賊まじの奇遇きぐうする夏なつこそは仰おほらう
 其子内そのこうちとて小子こごが父ちちあてのと有ある六む玄琢げんたく眉まゆと皺しわも夫そのとら
 如何いかうなる締と示し何なにより尊おや大人おとなハ死去しきのこさ下くだされバハ
 去きル五月ごがつ回家きか申まを卒すま山東馬しやんとまと喚よ做せのの劔術けんじゆつの遺い恨こんも
 朋輩ともだち澤井軍治さわいぐんぢする者ものと乞こ援えん我父わがちちと逃にげ討う兩人ふたり共ともに踪あと
 臨まみ下くだり逃にげ去されり存ぞん小子こご若わかく仇討あだう仕度しど妻奴つまぬととも
 當国とうこくへ尋たずねてつるを我父わがちち最後の時とき東馬とうまが預上よせうへ斬掛きりかけ
 痕あと負おせしうらうらうとまは若他國わかたにするとも先まづハ當所あつところは潜ひそび
 治療ちりやうするしうら夏有なつあるべとぞ下くだり是これ手てで幾許いくさの瘡げう医いは
 逢あい下くだり托たくして尋たずね訪とひひと今いまは知しる申まをさすとあまは

玄琢げんたくと磯いそと拍はき思おもひ當あり夏なつあり但ただ其士そのしの形かたち容ようハ
 如何いかよ。ささる年とし甲かハ壯許さうぢよとて傾かたく面色おほし赤あかくして蒼髯あまげ
 あつ。情なさけ愿ねが初はつ秋あき以もつ或夜あるや一人ひとりの士し金かね倉くら瘡げう治ちよ来きり
 其預上よせう了り恰さ三寸さんすん計けいの斬き痕こんあり世よと憚おそる者ものうらう國くに災わざと
 語かたらず一夜ひとよ朋友ともだちと見みて廿七八にじふしちはち支しの侍さむらいと同道どうだう。たましく
 京師きやうしハ知縁ちえんある結むすぶ及およびくる時とき其者そのもの接あは暗くらしと止とまるか
 瘡げう愈なり後のちハ来きる夏なつを渡わたり東渡とうたうとあきく賊まじは道みち医い
 と我父わがちち前まへ中ちゆうより一の眼ひとめハあつとぞ草葉くさばの陰かげより小子こごと
 呼よび導みちをさし雙ふた豆まめの門路かどと教おしへし成なる眼め彼かの水みづ
 うせと賞あがへし是これより直ただく西京さいけいへ上のぼると巴せ不ふ得とくぬ

環合本望達平ぐくく雀躍して喜ぶ玉琢狀然とて
 さる過去の因縁よりて今日不図足下は避避し人
 人死去のこさま一夏まで委細は美つもの就て不佞が
 ろぐら存ずるに雙敵を寛身ハ鬼角人目は掛つて一萬一
 大望の障とすもろくべき去バ今より編笠を回と隠し
 膏菜賣は刃と實んと上策るるべし固其菜方徳製ホ
 ハ不佞委く傳授すべしと則案上より嫺蘭解射の画書
 とり出し并に膏菜方劑製一方子で巨細は記し子へ
 け且東并して交る実下尊医方志の程多謝是とて
 我為少雙人と搜る孫兵司馬法の秘書るりと脱び

進く魚雁の便を以て委曲消息やべと遂に別と告
 龜谷の僑居へ戻つるる玉江久平東が帰りの遅きを
 如何して年間よりせしと問へ去り今日不図我父の執
 り逢ひ敵東馬が去向大栗ハ相知とてりとも宮小路玄
 琢が廬での一五二十と語るとまづ二人ハ大に喜説我を
 當所の日を送らんと無益なりとまづり龜谷の僑居を
 引拂ひ東海道へ出上方へと急ぎしるる

第十三回 池鯉鮒道中東等危難

斯く東亦ハ程うく三州路に及びし頃ハ霜月半あま
 寒疾日は増し海驛の風雨は肩てや東痛風の様ふて惣

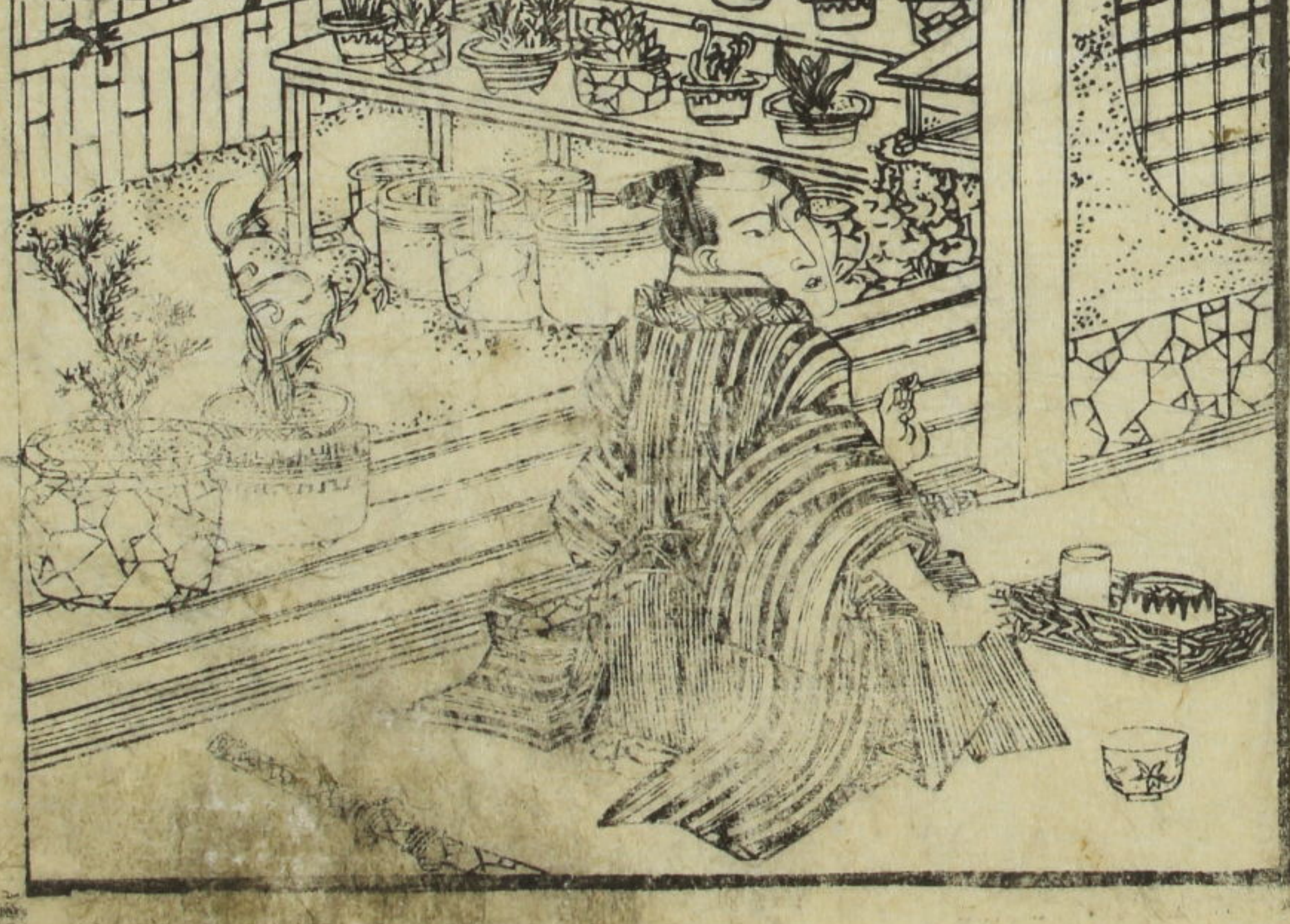
身少一づ、疼みたるが、昨今の夏るるべしと推て二日歩
 行せし、あや、田寄病と過る頃、脚頓り疼みたる、久
 久平王江、大い是と患ひ、早速途中、馬と借つと、東と無
 漸く一里餘、あつと、つらよ、馬卒ハ、池鯉鮒、釋の雲遊黨
 りて、肥腹の滂六と喚、做悪漢、りけ、今東が足病、
 艱み、歩行、り、且、旅、狎、る、足、弱、連、と、入、込、と、揺、て
 金と貪んと、肚裏、較、討、馬と止、久平、對、い、親、方、岡、崎
 池鯉鮒、三、里、半、の、道、程、三、百、五、十、文、を、肺、價、ハ、極、り、こ
 と、此、間、ハ、餘、程、道、を、延、て、酒、代、と、増、て、受、と、あ、や
 行、ま、ぬ、と、凶、奪、か、ま、成、程、道、の、夏、成、ら、お、と、も、價、ハ

遺すべけ、急ぎて馬と追ふべしと云へ、滂六、否、く、酒
 代と極む、馬ハ難、駈、且、此、若、輩、を、視、る、色、青、悴、て
 何、苦、痛、る、よ、大、方、瘡、毒、り、疫、病、患、て、晦、氣、が、知、ら、ず
 一、二、斗、も、飲、ね、ば、う、ね、ど、馬、も、急、せ、て、來、こ、う、と、輸、て、か、つ、て
 酒、價、ハ、三、貫、八、文、も、一、日、同、盡、し、我、輩、黨、も、て、辺、頃、閑、暇、し、
 馬、頭、觀、音、是、も、已、湯、で、ら、る、觀、音、さ、ぬ、奉、ろ、と、思、ふ、
 皆、二、貫、文、奉、加、し、貫、あ、ら、ら、ぬ、酒、價、合、し、僅、五、貫、錢、
 内、外、是、を、後、生、し、る、祈、禱、は、成、と、口、は、出、だ、の、惡、受、ふ、久
 平、ハ、あ、と、し、苦、痛、堪、え、る、病、入、の、肺、え、と、見、上、後、否、後

言さぬ悪棍の許計を許す
 身の上の故障をも成べしと
 怒りよと抑へ我くは道中を
 往復するの事と是年酒價
 三貫文をせし例あり去と
 病者とあつて這方も不肖
 のま二百文遣すべしと云ふ
 六冠を振つて合是頭目は街
 道して誰知らぬ者も肥腹



の誇六今迄人よ凶奪かたて
 ハ釈迦如来が来が来で陪話し地
 藏菩薩が障人よ立ても黙
 ちて夏つらひさあ急劇錢を
 擦りせし雲龍と花繡せし
 腕と腕し傍若無人の光景
 東見もて苦痛つらつら馬
 下と如何し馬卒我輩固
 洛費多き客も酒價
 ハ其方り公も任せ難し是



より下て及と歩り去ど其ううの代欲く六室め一駄價
 ハ遣さんと懐中より残取知して投合を六湾六八目も掛
 不否く已の池鯉射極めるま酒價合は苦もやふは
 と諾まざば久平の如不同して束を勅行人とすま六湾
 六路上り縦横縮みは寒風一襤褸一拵で送ぐ馬と
 與せ来て酒價もくま子も逃せんといふ武士は似合ぬ
 不届奴馬盗人よ拐兒とよ六夜揚て擾廻ま折くら前
 面の松蔭より九人の雲遊輩路傍に寄裏りと賭打て
 居り一が湾六が喚るをささけとさけ衆皆競ひ駈るり
 ころや義父何縁にす訳と話せと散動ハ否は頭目が池

鯉射究の肺價で此所迄ま酒價も呉子も逃せんとい
 すりゆゑそまて已が擾のよや汝輩も駈路の旋ぐ以後の
 懲りの這斯亦が衣類を剥と罵まは後點頭と悪棍も
 一寸先ハ闇雲接束夫婦が批胸縛を擲と圍ハ束の
 と思へども身森自由成らざま心斗りまあせり居る
 池江ハ女の身うがらも常より武技を嗜むかひぐり
 くも身と固め寄添二人と突跳し腕弱きまはて氷ま
 護刃刀と送るも持束と構うてま後息杖取つて湾
 六が打んとまを久平が頸助握で仰よ妻をへ倒と
 投合を起上りて武者振つて脚よて蹴倒し踏壁

ずらりとと抜けるかの背あ。そのや斬つて衆多が一齋
 攢撥と夏ともせず。頰腰背の避るゝ出ると僥幸難
 ちを挙動やと蟹の恙て知るしも雲撥ホころとる
 へと言まゝは啼の子あらしして逃去る久平一息
 つき斯る所は長居はららと東と肩は継らせ香
 見ある農家を便り。ぬく割て抵つとく途中もく
 へは逢へ。縁故曲は話と関々不房主と出如命
 池鯉射の雲控黨は悪提ありて時ぐる掠奪る平を若
 有しは遠くをいづ。絶えめさすて先這方へ入る
 休足せらとよと信ちるは波へくるあぞ。三人は

泣らば宥怒下さるるを。巾鞋脛中と解くも採先
 腰お負なるが東が早痛増く強く成けりも。櫻た
 家人と憑み一夜の止病と請まるとは房主と婦人の
 みて名は。仁慈なる性なり。三人とのことり。
 速く止病許し。と望朝は。とくも。兎角病ひ
 重り中く歩成難。各如何と業。煙ひる房
 主と婦人東等が狼狽するを。病氣疼る。服業をせ
 家人は。偏く看病心と添よる。江久平も。固
 朝夕妙法題目忘る。神佛の祈念篤りける。

東の足痛漸く薄くする。已に廿日許の平愈あり。三人の大人は喜悅寄病は長く逗留せんも死に似たり。各々之の準備あり。房主東亦は對の今寒氣強き節押して旅のめを。再び病氣起らんも斗難く。東陽を待て登程する。猶信母より。一夜東風。後ハ雀躍し堪ず。遂に遠所まで手を越ゆる。度で山茶梅花も。那所這所。用き此辺の氣。春めさる。今こそ旅の心易し。東等、房主夫婦は對の病氣も長く。寄病の内厚情の泰ら。附し。性質堅き。房主。金錢の附ハ清へ。

すと知つと東が刀の小柄は後藤某が彫けると取。實は才志も。患の十が一は執ひ。房主再三再四辞け。推して是と子へ庭男厨女。懇々形と造遂は家と。東ハ病後の滞留。日ど歩む。氣も健は鳴海。是も誓の。と熱田の神垣は神の驗の威徳と思ひ。桑名。旅衣の。三日路。四日市。萱草。置露も。増城の。光や石菖師。春の色深く。身の龜山。園の清水が。哲し。坂の下。近江と神風の。伊勢の。思は。余の土山。鈴鹿の宮。口。世と。

餘呀よ成りて行かどて念力の通らざるめや虎と見て石
部よころや年月のおのが草律も念はつて變て雙入よ
大津の駅と勢み連つて三人の宮古の空よ着よける。

第十四回

祇園酒肆東馬竊賊東等

斯て東よら程よく京師よ着ける。差當り浴中不情路
のまば。向まへ橋かせんよも知縁うけまば先宗門の本
山三条妙満寺へ結て後夏を謀らんと直よ尋ねるる
折らら從身戒淨坊已よ師命を受けて上つて居けまば大
よ喜び鎌倉よて医師玄球よ逢て一語もて馬路よて尋
難いせし夏もど結つて先都下よ止つて敵を捜索すべし

趣き談い合けまば戒淨坊人と頼みく東堀川下立此
あて菜舗の裏よ借屋させぬ其より東曩日よ玄球より
傳授請し膏茶を製手匠さ箱よ入を提げ深編笠を冠
癰疔腫物金瘡打撲の療治と喚ひて世願寺清水北野祇
園よと凡て人羣集野へ徘徊し玉江も同どく編笠をあて
面を隠し油をよ力と窺し一向敵を捜しくる久平ら
え下賤る者よ雙入曾て終めまば世間と噂らる
狭箱の先へ紙よ貼せし萬能膏と下げ針貫花瓶つけ
たる皂綿服よ三三尺斗るる大刀とまびひ發鬚頭顯よ
搜扎自ら奴僕の姿あて檀那か練る膏藥ハ酒家も

は下のりて、ふくこと大音にて十字街と喚ばりきともよ
雙敵の門路未りけるおも平山東馬次井真治兩人ハ音
信山よて藤代平内と殺傷し雪村が馬軸并よ丞料の
金子と奪ひ取房州洲原より松よ奈謙倉へ渡りし
轍下知縁の跡よ酒び居東馬が以上の痕と藤治して
後送倉ハ迎国よまば東が昇ねまを更とよ廻国修
行者よ亦谷隠よ京初よ登りしける先年東馬本國
あり時會洛中よ控び四糸河原の辺よ大鷹推兵衛
と喚使者と入魂せしよみあまば先其が宅へ昇ね
訪ひて同伴沢井真治と引合せ終つて仲も行く包難

けまば下總ふて武道の遺恨よ寄り藤代平内と討果
せし更打明話しける類を以て聚る推兵衛鬘跡大様
よ長須撫ながら善哉く仲も人と傷るむどの者らりて
臨時の役よ立難し今より吾儕後指よろう上の無遣
る、本船の胸の間よ昼寐すると思ひ子分よ勅法射
術など教へてり迄も我家よ居るへし何の辞も肯ひ
けるえ、推兵衛ハ四糸河原の使者の鬼魁ふく故郷
類をく明暮博奕と業と一飲酒よ耽りし常よ数多の
無頼子と隨へ花柳戯場と控りし閉争口論のみ更と
ける東馬軍治も初の程ら世と控りて敢て他出も受てり



山崎屋

廿八

山崎屋



東名 池の 夫 婦
 鯉 小 野
 危 難

五卷之四

あが後くハ権兵衛が祇園の新地大和屋と云へる娼樓
の花の井と喚花嬢は旧狎通ひけるは伴と深編笠と
目と酒び彼野の控びらるが固つと兩人とも女色は弱る
重負のまじりの西京娼妓の辞和らるは肌白く情
深くえあるは迷ひ折から新地へ通ひけは日暮日暮
取つと金子も漸は遺ひ消却しと一日権兵衛東
馬軍治の對い今日の水望月七日祇園會の初より貴
客建家内は居人もは炎暑は堪へ去來新地をうけて
縦觀あや行んとあまが何まも名は波へ祇園の祭礼
夫とて預ふ野のりとは撥て勇持し悪少年亦引領と

家とせよけける誠は當日天王神輿の渡る市街ハ猶さら
洛中の賑ひ大方さらず往來の羣集ハ捧續く涼傘の
中と分け行き左右の觀眺は立并ぶ金屏よ六山水を
人物樓臺ホの名馬綺筵は飾る銅瓶銀麈よ六花投
入の水際涼しく尚野々茶店の登り六堆然とて訕此
酒氏の山とる心太冷筋舞活塵表よ六拍楨の向り
瀑布と飛し自ら苦熱と子々計らり扱も次第
渡る屋體ハ太子山芦坊山天神山木賊山ホを弁
唐土の山くもて七本數百の入盤汗は浴して
曳行く光景幾しと

一ノ日

一ノ

纏糸雲が如し。童兒宝冠と戴き羯鼓を撃て其上に踊
 躍する者も尚小童が傍より團扇を扇いで是を揮揚。笛
 合する聲らりき古推うるさる。附屋體の祇園譚子
 自ら優くとして笑ふも京兆の風流なり。推兵衛亦ハ
 不覚奥より入て東西に漫行し夫より祇園の表門ハ
 酒肆に入半ハ湘簾を掲げ前庭と打り各り酒斟樂々
 居たりけるが如何しん東馬惘然として持てる觴
 と取落しん且バ推兵衛冷笑長兄何と浮きよのや
 とあつて東馬軍治し呷き推兵衛は對いあは花面
 花表の際のお蔭は懺建し膏藥賣漢を我と誤て

足下は話す藤代東はようも似たりと思ひし。又
 這方なる女の袖をが往來の人よ厭ま編笠想きたるを
 見まは擬もる死東が妻玉江より必定彼未已よと京下
 我等と辱るの疑ふとあはは推兵衛否く世間ハ
 容兒似る者も有る是去と方一其東ホるる捨置難
 去と言つて起て二人と潛かを伴ふ子身は諸バ合点くと
 俠士も態で彼の膏藥賣の前は抵つて腕さし伸べ
 膏藥一貫買ふべと言き東が編笠咽み這奴人は物
 活らから衆りこののすつとそ不れうると脱んとするを
 去つると捉つて膏藥と賣らうらぬハ這方の不問は編笠



八尋の城郭積換ささると衝放其後一人分物
 ちも言す脅さ延べ坐くるなど細瀬離れぬ東面
 色かく嗚呼やと見あるところより馳来る女の袖を替
 待てと中よ入らと二人と障へて身と屈めび人の眼を
 縁の替り悪き直のり唯幾へも四着怒下
 かと揺る陪話も不肯否うぬ知る直うら
 ひろくくと腕脱又立まんと為呼へ来る奴僕
 業賣二人の使士が兩肘捉て又揚て懸倒せ
 碓と白眼賣溜るる白童亦賣業黨ハ相見
 悪く立騒ぐと言はぬ五狩隊我が膏業の功



見せよ貼てえりのめ息の根止るを罵るが
 魂消らん最早の籠ひも似もやらぬ多ら
 たと高這つが逃げが久平東よ目駒
 らんも討らます今日ハ早く帰密めせと東
 病所とさして帰る影始終朧ふ東馬軍治
 う一と云へ照次権兵衛が委細ハ後中
 しく意と慕めてとて行ふ教

忠孝比玉傳卷之四終

